

宮沢賢治と天皇制

Miyazawa Kenji et le Mikado-isme

関戸嘉光*

SEKIDO Yosimitu

もし宮沢賢治がもう少し永生きしていたら、そしてシナ事変、大東亜戦争の渦中に身を置いていたら、彼はどんな態度をとっただろうか？ 歴史に「もし」はないといいますが、近代日本の思想史・精神史に納得のいく了解に到達しようとするとき、それは決して無意味な設問ではない。いや、むしろ、問題の根底にせまるために必要不可欠の問いではないか、と私は思います。

賢治は、あの戦争を積極的に肯定したのだろうか、真珠湾の大戦果を歓呼して迎えたのだろうか、それとも国際情勢の然らしむるところ、護国のためには止むなしとして消極的に肯定したのだろうか。あるいはまた、戦争そのものに反対の立場をとって積極的に反戦運動に挺身したのだろうか、そこまでは踏みきれず、ただ平和を祈念して消極的に戦争非協力の態度に止まったであろうか。

戦後の、まさにブームとっていいほどの賢治復興にもかかわらず、この点についての発言を私は殆ど知りません。もちろん私の不勉強のせいですが、平和と民主主義という戦後の大きな時代思潮のなかで宮沢賢治を担ぐには、それはあんまり都合のいい問題ではない、という理由もあってのことではないでしょうか。

宮沢賢治は、ご承知のとおり、1933年9月21日没です。今次の戦争の発端となった「満州事変」勃発のわずか二年後です。ですから、その後の戦局の拡大も大本営発表の大戦果も総て彼の没後のことで、それらについての彼の反応が残っていないのは当然です。ただ一つ、1932年8月30日付の伊藤与藏宛の書簡があります¹⁾。これが満州事変に触れていますから、今その全文を紹介しましょう。

軍務ご多端の中からご町重なお手紙を下さいまして厚くお礼申しあげます。

何よりまづ激しいご勤務炎熱の気候にも係らず愈々御健勝で邦家の為にご精励の段至心に祝しあげます。

いろいろそちらの模様就ては、弟への度々のお手紙また日報等に於る通信記事、殊に東京発刊の諸雑誌が載せた第二師団幹部とか、従軍記者達とかの座談会記録に仍て読んで居りますが、実に病弱私のごときただ身顛ひ声を呑んで出征の各位に済まないと思ふばかりです。

然しながら亦万里長城に日章旗が翻へるとか、北京(昔の)を南方指呼の間に望んで全軍傲らず水のやうに静まり返つてあるといふやうなことは、私共が全くの子供のときから、何べんもどこかで見た絵であるやうにも思ひ、あらゆる辛酸に尚よく耐えてその中に参加してゐられる方々が何とも羨しく(と申しては僭越ですがまあそんなやうに)感ずることもあるのです。

殊に江刺郡の平野宗といふ人とか、あなたとか、知つてゐる人たちも今現にその中に居られるといふやうなこと、既に熱河錦州の民が皇化を讃へて生活の堵に安じてあるといふやうなこと、いろいろこの三年の間の世界の転変を不思議なやうにさへ思ひます。

当地方稲作は最早全く安全圏内に入りました。初め五月六月には雨量不足を憂ひ、六月も25日になってやっと植付の始まった地区さへあり、また七月の半には、湿潤のため各所に稲熱病発生の特徴も見えたりしたのですが、結局は全期間を通じての数年にない高温によって成育は非常に順調に進み、出穂も数日早く穂も例年より著しく大きく、今の処県下全般としては作況

* 名誉教授

稍良と称せられてゐますが、西の方の湿田地帯などは仲々三割の増収でも利かないやうに思はれます。

私もお蔭で昨秋からは余程よく、尤も只今でも時々咯血もあり殊に咳が初まれば全身のたうつやうになって二時間半ぐらゐ続いたりしますが、その他の時は、弱く意気地ないながらも、どうやらあたり前らしく書きものをしたり石灰工場の事務をやったりして居ります。しかしもう只今ではどこへ顔を出す訳にもいかず殆んど社会からは葬られた形です、それでも何でも生きてる間に昔の立願を一応段落つけやうと毎日やっきとなつてゐる所で我ながら浅間しい姿です。

十月は御凱旋の趣、新聞紙上にも発表ありましたが、そちらとしてもだんだん秋でもありませうし、どうかいろいろ心身ご堅固に祖国の神々の護りを受けられ、世界戦史にもなかつたといはれる此の度の激しい御奉公を完成せられるやう祈りあげます。まづはお礼まで申しあげます。(圏点は引用者)

戦地への便りですから、それなりの自己規制が働いたことは当然考えられます。戦争を否定するようなことはもちろん、戦局の不利を匂わすほどのことさえ厳につつまねばならなかつたのです。これは国民的規模での常識だつたといつてよいでしょう。だから、そこに戦争を謳歌する表現があつたとしても、それをそっくりそのまま真にうけるべきではないし、戦争拒否のほめかしさえなかつたとしても、そんな意図がまるっきりなかつたと断定してもならないということ、これはいうまでもありません。

そんな条件を承知の上で、この賢治の手紙をもう一度読みなおしてみましょう。どうですか、賢治のこの戦争についての判断は？ 肯定的でしょうか、否定的でしょうか？

「北京を南方指呼の間に望んで全軍傲らず水のやうに静まり返つてゐる」といった表現は、おそらく伊藤からの賢治あての便りにあつた文章でしょうが、それを感動を込めて賢治が繰り返していることなど、私は賢治の本音がそこに読みとれると思うのですが……。

校本宮沢賢治全集の編者は「本書簡は軍務中の人にあつたものであるから、余計にそのような点に気がつかつて書かれたものとみられる」⁹² といつて、必ずしも賢治の本音ととるべきではないという解釈に傾いているようですが、私にはそうは思えません。また、編者の一人でもある天沢退二郎は「本心をいえばそう真剣に思いこんでるわけではないことをいかにも真顔で云つてみせている演技」といつて、賢治の本音ではないとしているかと思つと、すぐ続けて「宮沢賢治という抜きんでた個性の生活意識を一方でいいようもなく偏狭なものにとどめさせた地域的・時代的制約をじつによく実感させるものとして印象的なのである」ともいつていて、賢治が全生命をかけてその文学作品で以て訴へたかつたのは「こうした二重三重に制約された生活意識からの解放だつた……だから、さきほどの伊藤与蔵宛文面を手がかりにして、かれの作品に盛りこまれた思想に批判的再照明をあてるというようなことは、いささか浅薄な——といつてわるければ賢治作品を文学の問題としてとらえるのとは縁遠い手続きのように思われる」⁹³ ともいつて、こうした問題を問題にすること自体を無意味なこととして斥けています。しかし、これも私には肯えません。天沢は「賢治作品を文学の問題としてとらえる」といつていますが、その「文学」の概念が私とは異なるからでしょう。私は賢治作品を、文学の問題としてと同時にまた人生の問題としてとらえたい、とらえなければならぬ、と思うのです。

兎も角、私にとってこの書簡は、方向は正に180度逆ですが、高村光太郎の「暗愚小伝」⁹⁴ に匹敵するほどの重さ切実さをもつものとして重要視せざるをえないのです。

光太郎については、脱線になりますから控えますが、一こと二こと脱線を許して下さい。

高村光太郎は今次の戦争に、生命の根源からの蘇りを実感したのです。「新しき日に」⁹⁵ と題する詩があります。

新しき年真に新たなり。

東方の光世界に東方の意味を宣す。

幾千年の力蓄積していま爆発するのみ。

東方は倫理なり。

東方は美なり。
 断じて西暦千幾年の弱肉強食にあらず。
 世界の人類倫理に飢う。
 飢うるものにわが食を与ふるなり。
 わが食は道なり。
 道を体するもの東方日出づる国に住む。
 その一挙一動は中正にして愛に満つ。
 死はかるく義はおもく、
 古来東方の女性ことごとく美し。
 その美驕らず出しゃばらず、
 内に湛えて堅忍の力あり、
 男子みなその力に支へらる。
 世界の歴史いま新たなり。
 東方の倫理世界に布く。
 美しき東方の女徳いよいよ凜たり。

これは大東亜戦争開幕直後の作です。本土空襲が激化した戦争末期には「戦火」⁶⁾と題する作があります。

戦は人に迫りて未練をすてしむ。
 万死の間に生きて
 人ははじめて生活の何たるかを知る。
 すがすがしいかな
 真に戦ひ極むるものの日常。
 皇国戦火をくぐって
 いよいよ純にして大ならんとす。

あの戦争の当時を思い出すと、当時は国民の大部分が、指導者層だけでなく一般庶民も文化人・知識人も、ほとんどみんなこのような熱気に酔っていたのでした。それを、意識の皮相の現象とみるか、それとも意識の深部の噴出とみるか、この問題はあとまわしにさせて頂きましょう。最後の結論のところで述べることにいたしましょう。

戦後生まれで戦争体験を持たない皆さんは、こんな戦争を讚美し鼓舞する愛国詩をどう感じになるでしょうか。おそらく、ただ馬鹿々々しく無意味なものとして捨て去られるのではないのでしょうか。私たち戦争を体験した世代、戦争を指導した世代より一世代あとの世代は、あなたがた戦後世代とはまた違った感応があるのです。私個人についていえば、このような戦争詩は戦争の現実に

全く無知な、したがって意識的無意識的に真実を詐る罪悪として激しい怒りを感じるとともに、にもかかわらず、詩人の至純至高の心の鼓動が伝わってくる思いがして感動をさそわれるのです。

ということで、賢治に戻りましょう。

賢治には戦争を謳歌ないし肯定する作品は一つもありません。反対に、戦争を否定し平和を讚える作品なら、いくつも挙げることができます。

ですから、さきに挙げた伊藤与蔵宛の書簡にしても、それを文字通りに受けとるべきではない、時局を慮っての軍事検閲を意識しての文章だ、平和主義者宮沢賢治、この方がよっぽど賢治らしい賢治だ、ということになりそうです。事実、戦後大方はその方向に傾いています。

しかし私は、どうもそう簡単にはいかないと思うのです。いま挙げました高村光太郎のような場合もあるのですから。

光太郎は宮沢賢治とはちがって、アメリカに次いでパリに留学、ロダンの作品にも触れ、ヴェルレーヌ、マラルメらフランス象徴派の近代詩も学んでいます。帰国後は「パンの会」、「フェザン会」、「生活社」など中央の詩壇・画壇に自ら関係した人です。賢治のように「地域的・時代的制約」に縛られてはいませんでした。その光太郎にして斯くの如く然りなので、この問題、ただの推測で片づけてしまわず、資料にあたってもう少し厳密に検討する必要があると思います。

*

1918年3月、宮沢賢治は盛岡高等農林学校を卒業します。当時わが国は国民皆兵制で、満20歳になると男子はすべて徴兵検査を受けねばなりません。ただし、大学・高専在学中の者は25歳まで検査延期が認められていました。賢治は、卒業後、ただちに検査を受けるか、それとも、研究生として学校にのこって更に2ヶ年間延期の特典に浴するかを選択で、父政次郎と激しく争うこととなります。

当時、日本は日英同盟の関係でドイツと交戦中であり、ドイツの降服後もシベリアに出兵して赤軍ロシアと戦っていました。兵隊にとられれば、すぐ戦地へ送られる虞れもあったのです。父親はわが子かわいさから検査延期を極力すすめます。賢治はそれを倫理的に潔しとせず、頑強に反対し

ます。同年3月10日の父宛の書簡⁷⁾で、賢治は次のように切々と懇願しています。

(前略) 昨日一度、孰れなりとも御任せ致し候へども、実はあれより帰盛の途中又只今に至るまで誠に誠に心苦しく、到底之の様子にては自由に研究も郡への奉公も致し兼ね候。昨夜以来未だ何人にも研究科の事も話さず学校へも未だ聞ゆる筈無之候間、何卒今の中に御許可下され、矢張孰れにせよ1年足らずの間のみ学校に残る事と致し下され度候。私の只今の信仰、妄信にや御座候はん。私の只今の願、分際を知らぬ事にや御座候はん。兎に角私にとりては絶対なるものに御座候。聖道門の修業千中無一と思召され候はゞ、誠に及び難き事を悟らせ下さる事こそ御慈悲に御座候。斯て仏を得べしと信じ喜び勇みて懈怠上慢の身を起し誠の道に入らんと願ひ候ものを、只一途に御止め下され候事は、止むなき御慈悲とは申せ、実は悲しき事に御座候。仮令名もなき戦に果て候様見え候とも、私は輝く道に至り、願ひのごとくもなるべく候。

「我れは一人の為に死を避くるにあらず」とは申し候へ、実は昨日一度2年延期と定め候以来、実に従来に思ひもつかざる放縦なる心のみ起り、斯ては一向に墮落仕るのみに御座候。この放縦なる心は実に「我れはよき口実を得たり」と云ふ解怠の心の発達に御座候。父上には如何様に思はれ候とも、私の心の中には「動機は安穩なる時を選ぶ為、研究はこの方便」と叫ぶ厳正なる批判を断得ず候。

実にこれ最大の不幸を作るもの、自暴自棄の源となるものに御座候。斯ては遂に父上母上初め皆々様にも報じ奉る日の無き次第と相成るべく、誠に誠に戦慄仕り候。若し之が反対に御座候はゞ、仮令シベリヤに倒れても瞑すべく、若し入營の義務無之節は、更に明るく愉快に吾れ人の為に勉勵仕るべく候。私の申す事は過激にては更に無之、日本国の皆の人は私の立場に於てみな斯く致すべく候。この前にも申し上げ候通り、私一人は一天四海の帰する所、妙法蓮華經の御前に御供養下さるべく、然らば供養する人も供養の物も等しく光を放ちてそれ自らの最

大幸福と一切群生の福祉とを齎すべく候。

(中略) 子孫を断じ祖先の祭祀を停め候事は我日本人として最大の不孝に御座候へども、只今は何とも仕方なき時代に御座候。戦争は人口過剰の結果その調節として常に起るものに御座候。真実の幸福は、家富み子孫賢く物に不自由なきときにも欠け候事多く、誠の報恩は只速に仏道を成じて吾と衆生と共に法樂を受くるより外には無之御座候。(後略) (圈点、ルビおよび読点は引用者、明らかな誤字は訂正)

引用が少し長くなりましたが、宮沢賢治の精神構造の全体を、その頂点部分から底辺部分までを表白しているという点で重要だと思うからです。頂点は、いうまでもなく、彼の法華経信仰です。底辺は祖霊・地霊への素朴な自然な原始的な畏敬尊崇の観念です。親を思い、家を大事にし、国を護る、これは賢治にとって当然すぎるほど自明な人生の在り方だったので。

徴兵検査の件は、賢治は法華経信仰を楯にとって自分の主張でとうとう押しきってしまいます。同年4月末に検査。しかし幸か不幸か、結果は乙種合格補充兵役で、甲種合格現役入営ということにはなりません。これで父政次郎の心配も解消したわけです。

その頃、国民一般は、兵役についてどんな受けとめ方をしていたか? ここでちょっとそのことに触れておきましょう。

兵役は納税、教育と並んで国民の三大義務の一つであり、日本国民である以上、誰もが負わねばならない、それはよくわかっているが、だがやっばりあんまり有難くはない、というのが大方の気持だったといえると思います。軍隊生活の辛さなどは問題にしないとしても、一家の重要な働き手を二年、三年と失うことは大きな痛手だったからです。貧しい農山漁村の青年にとって、軍隊の食事は量質ともに満足なものであったし、三年の兵役を無事務め了えて上等兵で除隊することは誇りでもあったのですが、そしてそれが軍国主義日本の土台を構築する礎石でもあったのですが、それはそれとして、個人としては、利己的打算から敬遠されるのが一般だったので。柳家金語楼の新作落語「兵隊」はその間の心の葛藤を軽妙に茶

化して、我々庶民を大いに笑わせてくれました。(「非常時」を怒号する臨戦体制下に入るに及んで、これは上演禁止になりましたが)。

賢治が徴兵検査延期を頑強に拒否したのも、こうした時代の風潮の中でのことだったのです。その利己的な動機が、彼には我慢ならなかったのです。私たちはそこに、賢治の倫理的厳格主義を強く印象づけられるとともに、いま一つ、国家に対する忠誠心、義務感の固さを見出さざるをえないのであります。

賢治もまた、要するに時代の児でした。当時の日本人一般と同じ次元に立っていました。決して銀河系四次元宇宙を自由に飛びまわっていたわけでない、と私は思います。(例えそれが、彼の法華経信仰から描き出された念願の世界であったにしても)。

*

とはいえ、宮沢賢治が、人類世界の平和のみに限らず、生きとし生けるもの総ての宇宙的平和を悲願とする平和主義者であり、ありつづけたことは、これは疑う余地のない事実です。賢治には、戦争を肯定ないし謳歌する作品は一つもありません。反対に、戦争を否定し平和を讃える作品は、前に申しましたように幾つもあります。そういう主題をはっきり前面に出しているものに限っても、例えば「饑餓陣営(バナナン大将)」、「北守將軍と三人兄弟の医者」、「鳥の北斗七星」、「ビジテリアン大祭」などを挙げることができます。

バナナン大将の勲章はお菓子で、肩章はバナナです。それをお腹を空かせた部下の兵士たちが食べてしまいます。大将は怒りますが、部下が自責の念から自決しようとするのをみて、その誠心に感じて許します。そして「今わしは神のみ力を受けて新しい体操を発明したちゃ」といって、これまでの軍事教練をやめて果樹整枝法に型をとった生産体操を始めます。

北守將軍は漠北の敵を防ぐため、十万の大軍を率いて塞外の砂漠に遠征しますが、敵と戦闘を交えることは一度もなく、ただ逃げまわってばかりいます。それを追う敵の方が砂地を走るのに疲れてしまって脚気にかかりみんな死んでしまい、めでたく凱旋、ということになります。

「鳥の北斗七星」の鳥の大尉は、山鳥との戦で

「わたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまったやうに力いっぱいいたゝかひます」とマヂェルの星に誓います。そして「お腹が空いて山から出て来て、19隻に囲まれて殺された、あの山鳥を思ひ出して、あたらしい涙をこぼし……あゝ、マヂェル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界になりますやうに、そのためならば、わたくしのかからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません」と祈ります。

菜食主義派と肉食主義派との討論会の形式で展開される「ビジテリアン大祭」は、「鹿踊りのはじまり」などとほまたちがった型の、賢治のもう一つの型の童話ですが、同じく賢治童話中の宝といえる傑作です。そこには賢治の科学的知識がごく自然に縦横に駆使されていて、論理的にもなるほどと納得させられます。菜食主義を賢治は大別して同情派(生きものが可哀そう)と予防派(健康のため、病気の予防のため)との二つに分けることができるとし、その各々にまた幾段階かがあるとしています。動物質ならずべて、バターもミルクもカステラのような卵の入ったものも鰹のだしを使った煮物も一切いけないという絶対的的菜食主義から、「魚でも鮎のごときは硅藻をたべてるのでじつに可哀さうなものであり、鰻や鯉のごときはその鮎をはじめとしてあらゆる川中の小魚を食ふから、断じてとって喰っていない」⁹⁾ という大乘派まで、その中間に種々の折衷派があるといっています。(鰻井が大好きな私は、鰻を食べるたびにこれを思い出して、ちょっと安心します)。

まあ、こんな調子で、賢治が、人間だけに限らず、生きもの全体を視野に入れての平和主義者だったことは、疑いありません。

しかし、平和主義者必ずしも常に非戦論者とは限りません。菜食主義の場合に準じて申しますと、一口に平和主義者といっても、クェーカー教徒のような徹底した非戦論者からレジスタンスの闘士のような戦闘的反戦主義者まであって、この両極端の中間にさまざまな段階の折衷派が分布しています。賢治の平和主義は、そのどのあたりに位置づけられるか? これはちょっと厄介な問題

です。あるいは殆ど無意味な、とくに文学的には全く無意味な問題かもしれません。が、私には大事な問題なのです。「パケム・イン・テリス」と願う私にとっては。

これは、当時の時代思潮との相関において考察されねばならない問題ですから、まずそれをざっと一瞥しておきましょう。

*

宮沢賢治が生きた時代は、明治末から大正全期を挟んで昭和の初期まで、いわゆる大正デモクラシーとその残照の時代です。

四年つづいた第一次世界大戦、世界大戦といっても主戦場はヨーロッパでしたが、確かに大戦の名に価する戦争でした。戦争の惨禍を骨髓に徹して思い知らせてくれた戦争でした。ですから、戦争が終わると、何をにおいても平和を軍縮をという願いが、ヨーロッパだけでなく、全世界の声となったのでした。この世界的規模での平和願望から誕生したのが国際連盟でした。国家間の対立を超えた国際的組織・機関です。これは、国家間の紛争を戦争という手段に訴えることなく、国際的協議によって平和的に解決することを目的とした多分に理想主義的なものでした。一方、軍縮も実行に移されます。ワシントン条約で英・米・日の海軍主力艦が5・5・3の比率に抑えられました。それが後に5・15事件などをひき起こす原因の一つにもなったのですが、それは後のことで、今ここで申しておかねばならないことは、この世界的平和ムードに我が日本も例外的存在ではありえなかった、ということです。それは、明治新政府以来の軍国主義日本の歴史のなかで、平和主義に彩られた特異な一時期でした。小学国語読本でいえば、「ハタ・タコ」読本と「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」読本との中間の「ハナ・ハト」読本の時代です。

私が小学校に上がったのが1921年（大正10）です。だから、ほぼこの時期をおおうことになります。小学生のあの頃を顧みますと、なるほど自由主義教育だったなあと思います。例えば音楽、唱歌ですが、童謡の全盛時代でした。文部省唱歌というのは殆ど教わった記憶がありません。童謡ばかりでした。今はどうか知りませんが、私たちの頃は、男の子はみんな唱歌が嫌いでした。しかし童

謡はまた別で、特に「砂山」など気に入った童謡だと、心弾んで足を踏みならして歌ったものです。あの頃、小学校で教わった童謡は深く心の底に刻みこまれて、私たち一生の宝となったのでした。

とはいっても、軍国調が全くなかったというわけではありません。何処で覚えたのか、「橋中佐」とか「戦友」とか「軍艦マーチ」とか、軍歌も結構歌いましたし、桜井忠温の「肉弾」や水野広徳の「此一戦」など小学校上級では引っぱり肌でした。自然な愛国心は健在だったわけです。

だから、今次の敗戦後の軍国主義一掃とは様相が全くちがいます。つい最近まで、例えば甲子園の高校野球で開幕式の宣誓に「正々堂々闘うことを誓います」の「闘う」が禁句とされ、「正々堂々試合することを……」と云わされていた、あんな、何かの権力を憚った平和主義ではありませんでした。

しかし、平和謳歌の軍人嫌いは確かに時代を支配した風潮でした。陸海軍省などに出勤する軍人が、軍服は風呂敷づつみにして持って行き、向うで軍服に着替える、という話も聞きました。それほど軍人が白眼視されたわけでもないでしょうが、特別尊重されることもなかったということでしょう。

ともかく、時代は、阿部次郎の「三太郎の日記」⁹⁾や倉田百三の「愛と認識との出発」¹⁰⁾などが青年必読の教養書とされた時代、「赤い鳥」¹¹⁾はじめ「コドモノクニ」¹²⁾「金の船」¹³⁾など子どもの自然を取り戻し伸ばし育てることを目的とした児童雑誌が簇々刊行された時代、自由主義教育を目的とした「自由学園」¹⁴⁾や「文化学院」¹⁵⁾が創設された時代、トルストイが実践的トルストイ主義者¹⁶⁾を生むほど強い影響を与えクロボトキン¹⁷⁾の紹介が思想事件として大問題化した時代、そんな時代だったのです。

宮沢賢治の平和主義的非軍国主義的作品も、こうした時代思潮を抜きにしては考えられないと思います。これは別に、賢治評価を下げることになるわけではないこと、断るまでもないでしょう。賢治がどのような時代的影響をうけたか、そしてどのような、時代を超えた影響を与えたか、この両面を把握することが必要でしょう。

このような平和の追風を背に受けて、政治的に社会的に労働農民運動が活発化します。軍隊まで出動して鎮圧しなければならなかったあの米騒動をはじめ、小作争議、工場ストライキが全国的に瀕発します。さらに世界的には、レーニンに率いられたボルシェヴィキの社会主義革命の勝利がありました。

賢治の平和主義が、こうした歴史の激流に無関心でいられたわけではありません。彼が農学校教師をやめて自ら一個の農民になろうとしたのも、羅須地人協会を組織して附近の農村青年を集めて農業に美と喜びとを創造しようとしたのも、労農党の政治活動を支援し我が国最初の普通選挙（1928年2月）に同党から立候補した泉国三郎の応援に奔走したのも（惜敗）、みんなこれを実践において立証するものということができます。が、これは別稿で書きましたから省略します^{19）}。

さて、この平和の風の卓越も永続きしませんでした。東の間でした。

普通選挙とそれに続く昭和初期の数年をその頂点として、その後は急速に軍国主義へ傾斜していきます。満州事変（1931年9月）がその転換点でした。

風むぎは変わりました。賢治は？ 変わったのでしょうか、変わらなかったのでしょうか？ 私は、さしあたっては、変わったともいうべきだし、変わらなかったともいうべきだ、と答えねばならないと考えます。大変あいまいな、歯切れのわるい答で、答になっていないとおっしゃるでしょうが、ちょっと待って下さい、この問題に答えるには、賢治の信仰の問題にまで遡らねばならないのですから。もちろん誰の場合でも、ひとの信仰の内部にまで立ち入ることは不可能だし、許すべからざることでもありましようが、せめて信仰の外皮にでも触れることなしには、これは答えることのできない問題であり、また、そうすることによって、変わった、しかし変わらなかった、という、答にならない答の内容が幾分でも理解していただけるのではないかと思います。

*

というわけで、賢治の法華経信仰、とくに賢治と国柱会の関係について簡単にお話することに致します。

宮沢家の宗旨は浄土真宗で、一家はきわめて信心ぶかく、毎日の生活もお念仏で明けお念仏でくれるといった有様でした。そんな家庭環境に育ったので、賢治も四、五才の頃から「正信偈」や「白骨の御文章」を暗誦したと伝えられています。

そんな賢治がなぜ法華経信仰に改宗したのか、またそれはいつ頃か、確かめておきたい問題です。改宗の動機については、いろいろ諸家の説がありますが、本来個人の内心のことですから、究極的な解答は得べくもない問題でしょう。父親に対する反撥などというのは余りに皮相ですし、エディプス・コンプレックスなどについては余りに一般的すぎます。しかし、誰か有力な勧誘者が外部に存在したかというのと、その痕跡は見出せません。人は或いは天啓というかもしれない全くの偶然が契機となったようです。

動機の方は結局そんなことですが、改宗の時期はほぼ精確に推定されています。1914年3月、賢治は盛岡中学校を卒業しますが、家業をつぐため上級学校への進学は諦めさせられます。家業の質屋兼古着商の店番をさせられます。これは賢治の最も嫌った商売でした。その上、上級学校への進学志望は圧えがたい、諦めきれないものがあり、彼にとって悶々の毎日の連続でした。ノイローゼ状態だったといえます。そんな或る日偶然、賢治は島地大等の「漢和对照妙法蓮華経」を読み、まさに天啓ともいうべき強烈な感銘を受けます、生きる意欲と生きる喜びとを取り戻します。（賢治の精神的蘇生には、もう一つ原因がありました。それは、賢治の深刻な絶望状態を心配した父が、彼の進学志望を入れ盛岡高等農林学校受験を許可したことです）。

島地大等のこの本は、父政次郎の信仰上の友人高橋勘太郎^{19）}から政次郎へ贈られたものでした。大等も勘太郎も政次郎も宗旨は同じ浄土真宗です。その3人を経て賢治が手にしたこの本が、賢治にとって一生ゆらぐことのない法華経信仰の出発点となったのですから、思えば不思議なことです。

賢治の法華経との出会いは偶然であったとしても、日蓮主義のなかでも特に田中智学の国柱会に接近したことは偶然ではありません。国柱会が在家主義であり、演劇や文学などの文化活動ととも

に機関紙、著書など刊行物による宣伝活動を活潑に展開していた、その影響が大きいと思います。それよりも賢治自身が積極的に法華経、日蓮関係の文献類を探し求めたのでしょう。そのあげく、これだ！と共感したのが「本化妙宗式目講義録」その他の田中智学の著書論文演説だったのでしょう。賢治の国柱会入会は1920年秋で、彼が始めて法華経に出会ってから六年もたっています。その間、法華経の勉強に精力的に励んだにちがいません。そして到達したのが田中智学の国柱会だったのです。入会后直ちに賢治は親友の保阪嘉内に報せています。

「今度私は 国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は 日蓮聖人の御物です。従って今や私は 田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。謹んで此事を御知らせ致し 恭しくあなたの御帰正を祈り奉ります。……日蓮聖人は妙法蓮華経の法体であらせられ 田中先生は少くとも四十年来日蓮聖人と心の上でお離れになった事がないのです。これは決して決して間違ひありません。即ち 田中先生に 妙法が実にはっきり働いてゐるのを私は感じ私は信じ私は仰ぎ私は嘆じ 今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対に服従致します。御命令さへあれば私はシベリアの凍原にも支那の内地にも参ります。乃至東京で国柱会館の下足番をも致します。それで一生をも終ります。……」²⁰⁾

これは大正9年12月2日の日付の書簡ですが、賢治はすぐ追いかけて

「どうです、一諸に国柱会に入りませんか。一諸に正しい日蓮門下になろうではありませんか。……日蓮主義者。この語をあなたは好むまい。私も曾つては勿体なくも烈しく嫌ひました。但しそれは本当の日蓮主義者を見なかった為です。東京鶯谷国柱会館及「日蓮聖人の教義」「妙宗式目講義録」等は必ずあなたを感泣させるに相違ありません 合掌」²¹⁾

とも書いて、激しく保阪に入信をすすめています。

賢治をこれほどまでに魅了した国柱会とは、一体どんな理念の団体なのか。一口でいうと、日蓮主義の法華経信仰に拠る在家の宗教的文化的思想的運動体です。その理念は、国粹主義的国体観・

使命観に燃えたウルトラ・ナショナリズムです。会の機関紙「天業民報」(日刊)の購読をすすめる宣伝文があります、それを読むとその概略を覗うことができますから、以下その大要を引いておきます。これは賢治が保阪へ手紙に添えて送ったものです。

(前略) 現下中外の形勢は一般有識者の憂ふる所に有之別して現代思想の動揺甚しき今日に在ては最も根底固き一大覚悟を要すべく其帰決は繋りて淵源遠く根蒂堅き大思想なるを要し候此に於て吾が建国の精神を考察し其の使命のあるところを開明し依て以て世界の溷濁を清め時代の艱難を救ふの外無之候これ真に我が日本国体の世界的に闡揚せらるべき絶好の機運と奉存候

この時運に際りて道法的理義的に組織ある深遠堅実の哲理と実証の上に吾が日本国体を世界に公開し宣伝するは世界に対する日本の最高天職なると共に国民教養の基本たるべく候

今茲に贈呈致候萌え出でんとする緑色の「天業民報」紙上続載の『日本国体の研究』は此の民報主筆たる田中智学先生が四十有余年の蘊蓄創見を傾注して論明せる日蓮主義開頭日本国体の組織的雄篇に候吾等は此の田中先生の唱導にかゝる日本国体説によつて始めて日本民族としての使命を知り人生の意義を了するを得て闇夜に灯を得たる感有之候吾等同志は此の喜びを自ら私するに忍びず広く同胞の諸賢に勧めて同じく此の慶びに浴せんことを国の為世の為熱望に堪えず謹みて該紙一部を贈呈して連続御購読あらん事を御勧め申上候 恐々頓首²²⁾

賢治と国柱会については、上田哲のすぐれた研究書がありますので²³⁾、詳しいことはそれに譲ることに致します。私自身、多くをこの研究書から学びました。

このような意気ごみで国柱会に入会した賢治ではありましたが、「国柱会に対しては入信当時とはしだいに変化し、冷却した。表面へは出さなかったが批判的であった。それは国柱会の運動が国体主義中心となり軍部のファッション化に信念を与える役目をはたすようになったからである」²⁴⁾と堀尾青史はしていますが、上田はこれを厳しく

批判して、「なんら実証的裏付けのない推測」として斥け「〈表面へは出さなかった〉ものをどうして知ったのか、降神術でも使って承知したわけでもあるまい。国柱会の〈国体中心主義〉というのは大正末、昭和初期の日本社会のファッション化のころから始まったのではない。蓮華会、立正安国会の当時からのこの教団の基本的性格の一つである」²⁵⁾と述べています。そのとおりです。

戦後、宮沢賢治を語る人はたくさんいらっしゃいます。しかし、賢治の法華経信仰を語る人はあまり多くはありません。その法華経信仰も国柱会の超国家主義的なそれであることを語る人は殆ど皆無です。これは、事実を裏ぎるものです。事実は事実として卒直に受けとめなければなりません。それが科学の最も初歩的な前提でしょう。戦後の平和と民主主義のご時勢に不適合、不都合とあって、賢治のこのような側面を隠そうとするなら、これまた戦前戦中の時局迎合と同じ、戦後型の時局迎合というべきでしょう。

＊

宮沢賢治は国粹主義・超国家主義の国柱会教団に身を投じ終生変わりませんでした。満州事変を皇化恩沢の拡大として讃えました。これを卒直に認めなければならないと思います。しかも賢治の場合、それは決して時局便乗といった打算的なものは微塵もなく、純粋に自らの信念信仰からのことでした。これを賢治のマイナス面と片づけることに、私はちょっと躊躇します。賢治の作品における最も耀かしいものが、同時にまた、まさにそこから生いたっていると思うからです。

誤解を招くにきまっていると思われまますので、大へんいいにくいのですが、敢ていっておきましょう。賢治の信念信仰の核心にあったのは自己犠牲の願望であったということ、そしてそれはあの悲惨な特攻隊精神に直行するものであったということです。

いまそれを、私たちはどう判断評価しているでしょうか。おおかたは、愚かな無謀なことというでしょう。たしかにそうもいえます。しかし私は、それだけで済ますことは、どうしてもできません。効果のほどを考えれば、確かに愚かな無謀なことです。だが我々人間には、何かもっと貴重なもの、効果など問題にならない貴重なものがあ

る、人間精神はそれを求めずにはいられない、と私は思います。そして、あの特攻隊精神はそれを求めてそれを実現した、それは人間精神の最後の崇高性の実現だった、と私は思います。

賢治の自己犠牲願望、これは一々例をあげる必要はありますまい。賢治童話で繰りかえし描かれています。雪山童子や薩埵王子などの仏教説話がその背後にあったことは断るまでもないでしょう。が、今ここで一つお断りしておかなくてはならないことは、自己犠牲の願望とその讚美とは、時として大きな違いになるということです。自己犠牲を讚美することによって、他人に自己犠牲を強要するという結果になることがあるということです。これはもう、自己犠牲ではなく、他人犠牲です。これら仏教説話の旧い伝承も含めて法華経信仰のなかにどっぷり浸っていた賢治の場合、そんな第三者的視点の入りこむ余地はありませんでした。讚美が願望と一体になっているのです。

賢治の生活と文学において自己犠牲は絶対だった、と結論として申しあげておきます。

(1996. 9. 18 受理)

注

- 1) 校本宮澤賢治全集、筑摩書房、1974年刊、第13巻406～407頁。従来この書簡は1932年に書かれたものとされて来たが、この校本全集の編者の一人天沢退二郎は、後にこれを1933年の誤りと訂正している(天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』ちくま文庫、1993年刊104頁参照)。
- 受信人の伊藤与蔵は羅須地人協会に出入りしていた近隣の農村青年である(上掲校本全集、第13巻732頁参照)。
- 2) 上掲校本全集、第13巻669頁。
- 3) 上掲天沢退二郎著、ちくま文庫、1993年刊104～105頁。
- 4) 高村光太郎詩集、思潮社、1980年刊、83～93頁。
- 5) 同上、78頁。
- 6) 同上、82頁。
- 7) 上掲校本宮澤賢治全集、第13巻49～51頁。
- 8) 十字屋版、宮澤賢治全集、1939年6月刊、第3巻316頁。上掲校本全集では「ビヂテリアン大祭」は第8巻208～245頁に収録されているが、引用部分はない。第9巻516頁に「一九三一年極東ビヂテリアン大会見聞録」の校異として断片的に収録されている。

- 9) 岩波書店1914年刊、続篇の「第二」との合本は1918年刊。
- 10) 岩波書店1921年刊。
- 11) 鈴木三重吉の創刊、1918年～。
- 12) 1922年創刊。
- 13) 1919年創刊、1922年以降『金の星』と改題。
- 14) 1921年羽仁もと子が創設。
- 15) 1921年西村伊作が創設。
- 16) 徳富蘆花がトルストイをヤースナヤ・パリャーナに訪ねたのは1906年6月、『みづのたはこと』は1913年刊。武者小路実篤の「新しき村」建設は1918年11月。
- 17) 東大助教授森戸辰男の論文「クロボトキンの社会思想の研究」が『経済学研究』誌に発表されたのは1920年1月、そのため休職、新聞紙法違反で禁固2ヶ月の刑を受ける。
- 18) 拙稿「宮沢賢治と社会主義」、障害者の教育権を
 実現する会編増刊『人権と教育』20号、1994年5月、131～142頁。
- 19) 高橋勘太郎については、上掲校本全集 第14巻 461～462頁参照。
- 20) 上掲校本全集、第13巻193～194頁。
- 21) 同上195頁。保阪嘉内については保阪庸夫・小沢俊郎『宮沢賢治 友への手紙』筑摩書房、1968年刊の206～212頁に詳しい。
- 22) 上掲校本全集第13巻550～551頁。
- 23) 上田哲『宮沢賢治—その理想世界への道程』改訂版、明治書院、1985年刊。
- 24) 堀尾青史『年譜宮沢賢治』図書新聞社、1966年刊、93頁。
- 25) 上田哲上掲書、11～12頁。
- 付記) 本稿は1996年8月19～20日岩手県種山高原“星座の森”での賢治輪読会夏季合宿ゼミの報告である。執筆にあたって訂正加筆した。